

下  
諧  
饒  
舌  
錄

上

911.9
八
上



本公書或著一々饒  
 舌と歎を去る或傳燈錄  
 雪山の語ももく予  
 其書或覓するに接證  
 精博俳門如秘鍵文津  
 の之段以伐るるに益饒舌を



謙辭のし嗚呼公の未  
如鈔ある孰あきし張儀  
の舌とさるまぬの未し在不  
哉問はるを賈遠の舌と  
まはるまはる耕のつら百  
萬の師も退るるく七十

の城も下まはるし世の  
俳家者流三百も如書  
を讀むん、舌をま  
強らむる  
文化之元夏五

冬烘居士識

# 饒舌録 上卷

元木阿弥著

## 凡例

てふべきはのとすひひ白皇國のなりひりて歌よまれば  
 ままにさぬ河の中におつらうそれをりて定ふおんあれは詞の  
 本と末とをかあへ合ふ或るをきし初学いのもかうてふ  
 をそとらふべきを切字とのりてあり切字といふはまことの  
 なるべきをいふさればあるは切字といふも同しこと  
 なりそが中よ余情を多くめや かなふ かなふ 川  
 引て かなふ であらうが しのきをあまのこをれを 引せば  
 かなふとあるはるを切字といふは余情を多くめてある  
 とらふ余情を多くめてあるまゝのちのがまゝといひ然れまゝと  
 あるがれば所の例を以てしや 祈いことごとく本字ゆゑ切字格  
 せれるは字を切母う切字格といふをありとらふとてはハト  
 とけりて切字といふは切字ある物とあむはま紫みどらき



ま中 根のひきあけはきや 深きき 史邦

貫之の集

是も 深きき 根のひきあけはきやと切なり

ま中 梅はつらき春よめあそんといまや

是ハよきと切も格あれどいハ下つてきて  
割やと切なり 梅ハ切も格さるハつよはあそん  
みまの切も格さるハつよはあそん

ま中 枯たつて霜よ融かすかき風 秋風

是も 枯たつて霜よ融かすかき風と切なり

和花

ちる花もあそんやソのうらみもあそんを

是もソのうらみもあそんをいむん  
もソのうらみもあそんをいむん

ま中 老が才ふちるをどぶや 園夕

是も 老が才ふちるをどぶやと切なり

金葉

ま中 衣のぬれもこもま

是ハ袖のぬれもこもまききく  
のあははけやと切なり

つ中 我もきざ宿も来つやけは 貞徳

是も 我もきざ宿も来つやけはと切なり

ま中 山乃松契りこもつら

是ハ山の松の契りこもつら  
こもつらと切なり

ぬ中 ちりの香の花もちのぬや 妻雨

是ハ ちりの香の花もちのぬやと切なり

お松

ま中 ちりの香の花もちのぬやと切なり

ま中 ちりの香の花もちのぬやと切なり

是と申すきび一声のほは横とやと切なり

千載

こまねぬおまのぶやいふおまのむらたさみと笑ひ鳴くれのま

是ハおまぬまのこまと笑ひあかぬれのまはま  
ぬやいふまのぶやと切なり

むや 乃 様もまよをぶむや 鶏合 其角

是と申す合は死もまよぶむやと切なり

ちえり集

下 流の水よむむやまよまききけしありれおとけまのまら波

人ヤ

波のら成るればむぞまはれまらゆまをまらうらまや

古今

けんやとつふは波のらせまれば玉ぞみだれら  
ゆらまゆ袖まをうれうらまやハまよまをゆらま  
もまられくもあらドとまらまのまらまのまら  
まてんやまやめやとつふはまらまら

のくるやいのまあるまのこ

ゆや 加鳥昇乃肩小堂ゆや 更衣 乙由

是ハ云々なるまのまらまのまらまらと切なり

厚撰

救あぬぬまがこ山辺のほままらまらまのまらまらゆや

るや 音能るまらまらまのまらまら 園指

是ハつくりのまらまらまらまらまらと切なり是ハ  
句の中ちまら切なりまらまらまらまらと切なり  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

知ル見ル降ル敷ル契ル守ル移ル席ル流ル光ル鳴ル  
照ル折ル成ル宿ル樵ル回ル取ル賣ル遣ル配ル語ル

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

流るる 乱るる 別るる 思ふる 知るる 隠るる 顕るる

頼多

時ハつく格とぞのや 穀ホのむまび 河ハつよづく  
格あれども上よりぞのや 穀ホまてかる時ハむまびと  
なりて切々又上より 外まきく時ハむまび河ハ  
つよづく切々格ある時ハ申下下をるとハそれぬ  
くおをつふむる時ハ切れも一づきもさる格ま  
ぞのや 穀のむまび 河ハ外よりある時ハむまび  
河ハこれおれ一河あるものあり

るや

氷よりさるるや 砂こま

其角

是も初こまみおよりさるるやと切こり

るや

一つとろは 捨ふなるや 運末賣

其角

是も運末より一つとろは 捨ふなるやと切こり

成

お吉介

袖もも月うれとハ契りおぢあこ下 山でえ

是ハ山つれ山でえおぢあこ下 山でえ

りや

前々るありや 火桶乃 接ん

存義

是も火桶の接んおぢあこ下 山でえ

於道

春の折ふところもむとつあるハやうぬをり下 山でえ

是ハ春の折ふところもむとつあるハやうぬをり下 山でえ

るま

枯尾花す 砂く力も かりき

勇音

けるまのきハげりた及のきまをさるるまやハおり  
けりやとつよまをげりともむま時一字ある時を  
るまのきまを切べとも又上よりけりまをさるるま

恒於道

かりなるみのおれ浦のらせ貝むき名のころハおり

るまのきハ元祿の以乃 爰白ハおりまをさるるま  
爰白ハおりまをさるるま











是ハ下より上へちうへてアアをあれバかまのくの  
 海をやハ山や花。朝らんと二字入てらんこと。  
 尔ををはを舍せしアアをよて二十の格にこれらふたど  
 らて上は押のつらざらふの片をもむむ白紙紙とら  
 べー詞を入てアアをあるもさうまの上よりけりりま  
 まいびいて一字二字三字迄は限るこゝあれハ十八九  
 二十とふとらぬて余情も四字の句ハのをざらお  
 とらねべーと字の余情を入てアアとのすハ

⓪ 風雅

花やまき煙時

ナニ

是もまづりてををえなれば阿しぬ馬土のまづり  
 さゆらま風花やまき煙とらりこらり  
 ままあらん煙あらんとの字入てアアをよて二十  
 入てアアの例あれバあむよ二十の格ありとさ  
 べーは格ハもて前もあむも初め阿ま  
 ありこらハ一字二字三字迄は限りてこゝをた

入てアアあり初め阿ハ字の例は切り格を  
 かゝぬ字よりまづりこらを初め阿はてまづり  
 ありとらあし上よりけりりよまづらびいて一字二  
 字と字入るこらあハ

外十八

人よあをを買せ我ハ年忘

オセカ

是ハ外のりあれバ三とらりこらハもと一字入  
 てアアをを合合てアアをよて十八の格にけむと一字  
 入るともらと二字入るハ上よりけりりまづらびい  
 上のりぞのや髪ホの時ハあ来強とむま格  
 上のり外まらる時ハあ来強とむま格  
 されバあむもとらりこらハ

榮枯香雪蝶の翅またまきの也

オセカ

といへり是ハ外のりあれバあむとむまびて阿まけ  
 やハあむもらまらこらあハとああてらるのざりり



古今  
神を月時多ありおたるあし葉のあまの宮にちりて是  
是もをよりくりて是と當りくる下一あると  
二字入てはまこと

○切り切 たみめ我手の紙合紙 若良

是ハ紙をまよとみめ我手の何れと切りぞく  
まどて切り格の上のくりまうりづば只を推くおと

【数十九】 春のあはるれ初瀬乃堂紙 若良

是ハ数の河よしたれとつたりかりて紙と  
当りくる下一あると二字入てるとて尔をばを  
合てはまこと十九の格く

古今  
【数】 いもあかある山をふまては荒もいづの初乃志波  
是もいづと数の河よりかりて波と當りくる  
下一あると二字入てはまこと

○切り数 猿丸の山づげづこ綱代守 正義

是ハ綱代守さる丸乃山づげづこと切り切り数  
と数のまの下一づくとえ合てはまこと

【数十九】 されをこ持て荒れぬは雲の宿 若良

是ハこのよりかりて者と當りくる下一あると二  
字入てはとて尔をえ紙合てはまこと十九の格  
く又このまて切りとつとハ例ありこを  
当りくる格も 十九二十の格あり

【数九】 玉糸飯ハ推より蓮ふらそ 作者不知

是ハこのまて當りくる下一あると二字入てれとて尔を  
は紙合てはまこと十九の格く

若良  
あはる乃海ぶ小年ハ終めぬも心のまの上よのこあそ  
是もこのまて當りくる下一あると二字入てれと





⑤ 古々 梅は花のさかすかに

是のころはさかすかに  
人々の心を惹きつけ  
はたかたといふは  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
のせいさかすかにさかすかに  
題とていふにさかすかに  
のせいさかすかにさかすかに  
はたかたといふは  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
格とていふは

寛格

是のころはさかすかに  
はたかたといふは

梅は花のさかすかに  
人々の心を惹きつけ  
はたかたといふは  
さかすかにさかすかに

寛格

枯枝子鶴のさかすかに

是のころはさかすかに  
はたかたといふは  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに  
さかすかにさかすかに



**外** 彩古今

ちりかろふ茶あぐれぬ大井川づれぬをまじらぬ柵カサ

是もあぐれと歎まの柵とありける下カサ

**二** 浮舟茶系

おれこそいさよとるまへん人のゆくへまじらふ者のみ水

是はこそよりかりて二のうつあをまじとありける  
下あれと二字入て字とまじまは 者の下  
あふまじまをハ字守あるトあれみ一人乃れ  
来ハまじらふとわらふやまじり

**三** 忠及百

さもこそいさよハおれ歎ナギわらひあぐらるるあ神のうふ

是ハこそいさよのあまひ河をぞ又まじあれとハ  
をふくませむと語く是もあまの格と同トあり  
これいさよハ河をあまける格とんぬべ

**外** 彩古今

まじらへハ神の宮ハ神まじりてまじらふは浦の柵カサ

是ハ河のまじりかりけれハハ外のうりて風と

**外** 松達

あまの年まじりけるよりまじりておれ格カサ

是もまよりかりける外のうりて聲とありける  
下ありと二字入てまじり

**外** 金茶

ぬれ人といふも理カサさあ申よ人のまじりてまじりけれハ

是もよりかりけれハ外のうりて理ト  
ありける下ありと二字入てまじり  
申よ人の心をとりまあれハ無人といふも理  
ありとまじりては外格とぬれまじり

**外十九**

是ハとハ平花の茶サ山

貞室

これこそ白の中よりまじりて平花のといつる  
ざるあまをまじりて是もあまを平花の  
申よこれハと平花とまじりて平花の  
はれハとよりかりける外のうりて平花とありける  
下ありと二字入てりてまじりて平花と

け外々ありけ格に教をきて教るまを引合教  
 り小あるて赤を波の限りを足まされい赤ましくて  
 白波べー抑教文ハそのよりい事ましくるんて  
 足まるとハ何れをいれま初まひのともがくらん  
 ままもこれバいけいまいあふおれいこまい  
 く教よりいこばるるいやれまい事あひそ

饒舌録上巻目録

そのや教ホ教例	十八のひら
ぞ教むまび辞	十九のひら
ぞ教部	二十のひら
の教部	二十一のひら
や教部	二十二のひら
り教部	二十三のひら
か教部	二十四のひら
教初教部	六十七のひら

ぞのや類法例

ぞ 下ふむまび詞あるぞをよ

の かつ結の小あふびぞといふまきやれ亦又かといふ  
はまやれ亦をのよるのをよ又句つりよるのを  
もよあり

や 下ふむまび詞の何るもがひのやをよ

類 いろいろに引れいゝいゝくおまおと  
かぞたれたがたそなどの類いゝがひ乃  
詞を一々類といひて下ふむまび辞ある類詞  
をいふなり

○類詞の下は文字も文字又ハ引もとおるハまて  
下むまびよわつたばたを繋ありとんたへそ中よ

穀の下みでとりりてもまき下は穀のまのつぎきて下に  
むまび河のあるもこれれあれども穀河の下まもとり  
はまきて下のむまびは不及たを河ありとんたべー

くよーも たれも ころも たがつるも ころも  
く千代も いくも いく日も たまも いくも  
づも たれがたも ころも 何れも たまも  
いくもある山ありとも たれとも

けれひ穀河のまも。又字あふたを河とて下のむまび  
ころづべ

○呼ま他をさしてつふ穀河もたを茶なれば下のむまびは  
不及他はさしてつふとハ

古今  
みちれくの志のぶをぢりたれ申をなむれをり我からなくハ

是はまき人のむらして他の人故はみむれもつが他を

さしてつる穀河あり

けがハのれまこ

全葉

毛漢乃まきこの穀もたはあづびつきせまえゆる君がほ代ふ

是はまきこの穀ハ樹の穀もあふとつふまあれを  
他をつふ穀はけごとく穀ひ河をがう他のより穀  
およ たれ いづく かを つま たを河あれは下の  
むまびハ不及されがれむまびのや せいこをに  
かさぬりてもさつづべ下ハ糸もつとまを  
りあり

○穀まいぞとつふハナニトゾとつふをあるもたを茶なれば下のむま  
びハ不及又いぞまドウシテとつふをあるハ下まむまひ河を倒之

○穀ハソクローとつらとつらも ころとつらとつら  
イワンマニヤラ とつふをあるもま茶なれば下のむまびハく  
はされども下まき河ひのやをぢりまきやうなるホハのつら  
ま外をこをふをありてもさつづべ下ハ糸もつとまを也

教の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

○ 算の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

○ 計の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

その心算を以て其の格の河の心算を以て

○ 計の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

○ 計の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

○ 計の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

○ 計の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜

○ 計の心算を以て其の格の河の心算を以て  
〜







七弦歌

く屯つぬふむる聖<sup>聖</sup>也

⑥ けく屯つぬふむる子<sup>子</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

⑥ ①

廻廊<sup>廻廊</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

聖<sup>聖</sup>也

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ①

⑥ ①

風<sup>風</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

聖<sup>聖</sup>也

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 風<sup>風</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

古今 是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 風<sup>風</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

⑥ ①

阿<sup>阿</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

阿<sup>阿</sup>

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 阿<sup>阿</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

聖<sup>聖</sup>

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 阿<sup>阿</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

⑥ ①

湖舟<sup>湖舟</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

湖舟

浮探

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 湖舟<sup>湖舟</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

⑥ ①

卷<sup>卷</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

卷

上<sup>上</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 卷<sup>卷</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

古今

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 卷<sup>卷</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

⑥ ①

真山<sup>真山</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

真山

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 真山<sup>真山</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

古今

是<sup>是</sup>、<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> ① 真山<sup>真山</sup>の如<sup>如</sup>也<sup>也</sup> 聖<sup>聖</sup>也

〔六〕 空よちれ 敷ぞはがむ 言のふ 宗祇

是ハ意の花をよちれあられぞつむと切なり

古今 我唐ハ都ハみらるる志をまむ世を定活山と人ハつらなり

是ハ世を定活山と人ハつらなり 我唐ハ都ハみらるる志をまむと切なり

〔六〕 今ぞん 誕生くつる 月ハ花 宗英

是ハ誕生くつる方ハ花今ぞんと切なり

於送 うあきあきいづ海のなをも君をらんを言の神乃なをづくは送

是ハ少女の袖のふでつくまをまてうごきあきあきいづ海のなをも君をらんと切なり

〔六〕 郭公あきをぞ来らん 郭の面 玄ま

是ハ郭の面はくも来あきもぞ来あんと切なり けちあんののあんと又ハキ又ハシのまこ

新千載 意くくハ都のまろふくひまの鳴をきまらん花いたくしる

是ハ西の夕みの白牡丹よもくちくして又ハあくもたきを来あんとぞ来あんと切なり けちあんののあんと又ハキ又ハシのまこ

古今 孝百折はまを来つてははる百代をいふんハ神を志する

千六百 孝百折はまを来つてははる百代をいふんハ神を志する

こねらひ二方分りあをよつひのそまハけ 追くうりこり是ホホあせくしてをのや 此そけおもき格の詞乃まこのとほりてあ 此まををつくべしをこのあを切なり ありとらねー又ぞのまをけあハあま いたくされバ花あまをえんま

六帖  
はくれ

是ハぞといふまきやれ所をあんといふけを  
のまのあん下子むまび行ありこれらにむと  
むまびてむと交て下つづきとて上つづりて  
づれいよ何うあまぶれあるんと思ふまきこ  
けぞのまこれたんハぞまといふくまれく是は  
文章子おほくあるあんこ

古今序

- いつよとていふれといふあんはまかまへき
- 昔がいつくれといふとこあまんかま
- そのまきまをいふまきまきくれんあまぬ
- 赤んはんまらかまもよたんこかまあまを
- つづきまがけまきまきまかれてけ時よあくるま  
あんよ終こむぬ

はごくこれがんとよまを此格のむまび行きてぬり

る

夕涼よくぞ男お生れらる

其角

古今  
け白下ゆまけりよあれバ写本を用ふ  
冬こそり思ひけぬを本のちより元よる迄まきふりらる

●このまきまきま

●今月勢おまきまを恨あれ

是ハぞよりりりりてれと思ふり是ハむかふるこ

金葉

これハ下つづきとてあまび詞をまきまきま  
あまきまきまをよまきまきまきまきまきまきま  
はるをれまきまきまきまきまきまきまきまきま  
しりまきま下つづきまきまきまきまきまきまきま  
まきまきまあまきまきまきまきまきまきまきま

る

橘の香をうけりぬる素直に里

珍々

是ハあま此里橘の香をうけりぬるまきまきま

古今 秋末ぬしあははちやうよんそねども風のききぞおどろくれぬ。

●このそねるあまのい

●ちるたびは見えを拾ひぬけしはな 惟ふか  
是いぞよましくる時ハぬかとむきふべきとある  
をぬとむきびくはたこのそね 貴のうりはぬ  
又つとあまびいなる意格あれどもぞいひのやこそ  
はの意格あり

る 言は日ハ舟のこゑぞありたる

羽蓋

古今 夫こととそひけぬを本れらうり花とるるまき言をやりける

る 夕涼おひをひづる 露乃とさ 洞月

是ハ夕まき舟露のうそひをひづるといなり

於き 考れし川のつひにたれづる。そを物思ふ人のあまは

是ハつまやまのあまふ人のあまはよまきれし川の  
とぞつひにあれづるとするそそいひあれづる  
と字あやかりあまも上もまきとあまをさるべし

上よりをのや敷まかる時ハつる。ぬるとむき格  
上より外まうる時ハ つぬ とむき格

る 子城連てまきとぞ 糖釘舟 芝山

是もうい舟まをつれてうたををんまるといなり

千載 山まうる殿まのうりつるま物うり風をまきとぞ

る 本れ兼ちる音ぞ吹ゆる 蓆甘敷 莫山

是も蓆有夜本のをまける音ぞ吹ゆるといなり

巨探 秋風よさををれしる存ふのや井なるかまらわを吹ゆる

上より 外のうりは時ハ吹ゆるとある格

合察

言はしもまづいもを尺卯の花とるれば月の氣もまゆ  
けゆとあることをくまづぬふむるを二  
字上と交てく尺卯をえゆ 尺卯を  
いふ人あれども志うらたてはとぞあまのあり

まてにさゆいんやんやんとありける。奇よ  
んをつけてうらべうた。上のうりに志さふせ  
ころけべー

有

鷲の子寺を志する。夏木立

林原

是ハ夏木立。己子ノ家寺ヲ志スル。と切リ。その  
ノ類ホマシク。時ハ引ク。といふ。何ハ。く。といふ。ま  
ぶ格。上より。加の。より。此。時ハ。引。し。といふ。を。河。も。ま  
た。る。志。する。切。ある。己。子。の。い。ま。る。志。する。と。いふ。ま  
定。り。こ。又。ある。と。い。ふ。ね。バ。一。字。な。り。さ。る。時。ハ。お。だ。れ。つ  
引。だ。れ。つ。引。だ。れ。つ。お。も。れ。つ。引。だ。れ。つ。な。り。つ。あ。り  
れ。つ。引。だ。れ。つ。

六る

約柿の者。を。り。る。水。時。多。

其角

是ハ少志。だれ。つ。り。柿。の。者。を。り。る。と。知。り。

古介  
つ。き。の。結。本。れ。も。と。ま。や。ふ。ま。す。を。も。ま。の。山。の。陰。を。こ。ひ。つ

是ハ。ま。の。山。の。ぐ。げ。な。ま。を。ひ。つ。は。く。な。ま。の  
本。の。も。と。こ。こ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま  
あり。け。つ。つ。ハ。で。ま。う。あ。つ。く。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま  
ア。る。あ。る。づ。ハ。お。あ。く。て。ま。か。あ。つ。つ。と  
お。あ。く。つ。つ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま  
つ。お。あ。く。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

望き

乃燈のまけをさむき。雲。燐。

故人

是も。ま。の。くれ。乃。燈。の。ま。け。を。ま。手。と。知。り。

望き

乃草末より七夕。を。覚。ふ。ま。

乃。分

望き

佛より神を。た。あ。ま。ぎ。を。説。の。ま。

ま。め

是ハ。け。ま。の。ま。を。あ。る。け。た。り。神。を。こ。ま。手。と。知。り  
上。より。外。ま。ま。り。つ。る。時。ハ。現。生。の。一。ま。し。お。ま。を。格。え  
古介  
跡。り。あ。く。ち。る。を。め。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま

是ハさくら花ありてよの車にさくら花の  
のこりありてちちをめでしはとちちのさくら

聖 き

雲ゆくれば二人陰縁をたのめ

古風

聖 き

志く東のちちめを少く口をさ

昌徳

聖 き

郭公あらくれをいそぐき

古風

よりいどのや散あまかき時ハハ一きといそぐ  
河ハハ一きといそぐ格は是ハハ一も現生也也現生く  
●  
●  
●

● 豆粒のつりぬぞうれし月のこ

是ハをよりくりて現生のハ一もいそぐびとらごと  
のそごころ是ハををいそぐハ一も現生也也現生く

古今

まは昔の若かりしころ我を社とがられきとたけをわびき

るま し

志神は救吹風をあら

るま

神堂

古今

みどりある初らふあをまはえし秋の色は秋の色をまは

是ハをニツありてハ下のけるこそ切るこそ

ら

妻こそよ麻を披むら村も

本阿

けりといふもいひ河はらへんのこころ是ハ切る  
るま妻のよ麻を披むら村も

古今

けりよわりもよ麻を披むら山のまげれあを今まはら  
ら

ラカ

りいおしけりいけりいけりいけりいけりいけりいけり  
あるとんねべいあ白まはらむとまれあ  
ちよおめりり

け

菅笠の白きをむきあはらむ

尚致

新編 志づんて色まさりゆく事ありも人の心ぞかましなるべし

是ハ下よふをそへり上ぞのや頼あそへり  
時のけら〜ハ ケロカ のまきるるかたみけ

是迄をみくりれむをび河を禮分禮分よんまきるごとく  
ゆ〜をよりかりてお〜とむまび〜るまゝの足あ〜ら  
絲バ〜をね〜もま〜まより〜ハ ハ ともむまび〜  
そふ遠波い〜れ限りあき〜のや〜ふれり〜もどれ  
むまび河い〜ま〜く跡らび足ま〜る〜をよりかり〜  
お〜とありたるあま

<sup>任撰</sup> 宇治山のみみぢをまびがも月のさけ日たもまびがあ〜  
ハ

○是より下ハをを初め河ま〜むまびたる十九の格を  
外を〜のををい〜せり

を 十九の格 是ハ初め河ま〜る〜をい〜

十九 ままび〜を満〜の時鳥。 尚敬

是ハをよりかりて初め河ま〜 郭公とあり〜  
ふ〜あ〜と二字入〜るとそふをた〜合してゆ〜  
ま〜十九の格〜け格ハをの〜りま〜く〜  
ハ凡例の中よおせり足合〜ハ〜

いひなけま〜むまび格

いひな 月むらむら〜もか〜を満〜の浦 典立

是ハ月むらりむら〜もかく〜むむ〜ん〜  
るをほ〜の浦〜いひなけま〜とのり

此處がろふ人の心秋ま〜れ〜今ハよ〜ま〜き〜  
上乃〜

是ハ今ハよ〜ま〜き〜  
第一いひなけま〜とのり



切るぞ

切るぞい上よりけつりいはうくちしづきをこ  
のめりはおくぞこむしびしもうくちしづきを  
ぞいひけるものこ

切ぞ

芳仲をて横をせうを捨木笠 もせ成

是ハかの本をようれきとさらえせうぞと切りとき

切ぞ

月の時をあらむふをあらむけ 暮太

是も月のよきこもむけとあらむふをと切りとき

切ぞ

津原をとれば大根引 中彼

是も大根引をちまきをとれば大根引ぞと切りとき

切ぞ

ふらりと春能んぞわらきに 市凶

是も時もいらりとまのんぞと切りとき

切ぞ

蛤乃を見よ別建次秋ぞ 在屯

千載 かひてよりせひときをいときのこらいりのめらなきせんと

是ハ一葉のこらいりのめらなきせんといふの

とよりのいひときと切りとき

とひひとひくぞ

是ハ上は談言らりて下よぞときをき

とひくぞ

あまくぞ花見る人の長刀 去来

是ハあまくる人のめらくとあらむぞと切りとき

とひくぞ

初葉をよみとおよりぞ船の中 其角

是ハ舟の中をよみとおよりと切りとき

とひくぞ

新顔を傘がしらへんぞ 英一棟 曉雲

是ハ新顔を傘がしらへんぞと切りとき

とひくぞ

百ありていらぶがおぞならむ 木と

とひくぞ

どちらうらうはなぞ麻よこと行 暮太

是ハ麻よこと行をと切りとき



の部

くまのぬをぬる 飛鳥

⑥く 春北風日利す此風ゆ 宗基

是のよかりしとて此にけり しのぶに  
死にたが中へも花のいろをよみ又のよみ  
るもあはれ

古今 春に花の中へは白きものもあはれとて

⑥た 春をよみけり此風ゆ 仙化

是に花のよみけり しのぶにけり 是の  
よかりし

⑥つ 渡舟よみけり此風ゆ 正香

よかりしとて此にけり しのぶに  
古今 春に花の中へは白きものもあはれとて

⑥ぬ 志んれ孫又此風ゆ 小枝

是のよかりしとて此にけり しのぶに  
外にけり 是又とて此に格

古今 春に花の中へは白きものもあはれとて

⑥ふ 京繁葉を年此風ゆ 文卿

是に倍中名をよみ しのぶにけり

十載 夕陽中秋のよかりしとて此にけり しのぶに

⑥た 鳥籠のよみ此風ゆ 季吟

是に倍中名をよみ しのぶにけり  
時よかりしとて此にけり しのぶに  
格あり 是のよかりしとて此に格  
かよみ 是のよかりしとて此に格

Handwritten text at the top of the page, likely a title or introductory note.

六打 朝報の發行 (Chōhō no Isshū) 田上見

是、朝報の發行を指す。朝報は、朝刊の新聞である。

六打 子母の養育 (Shimbo no Yōiku) 尾掛

是、母が子を養育することを指す。養育は、育てることを意味する。

六打 養育の場 (Yōiku no Ba) 知日

是、養育が行われる場所を指す。養育の場は、家庭や保育園などである。

大物 山 (Yama) 山

六打 山 (Yama) 水

是、山と水を指す。山は、陸地の隆起部であり、水は、液体の存在を指す。

六打 山 (Yama) 水 (Mizu)

是、山と水を指す。山は、陸地の隆起部であり、水は、液体の存在を指す。

六打 山 (Yama) 水 (Mizu)

是、山と水を指す。山は、陸地の隆起部であり、水は、液体の存在を指す。

六打 山 (Yama) 水 (Mizu)

是、山と水を指す。山は、陸地の隆起部であり、水は、液体の存在を指す。

六打 山 (Yama) 水 (Mizu)

是、山と水を指す。山は、陸地の隆起部であり、水は、液体の存在を指す。

六打 山 (Yama) 水 (Mizu)

是、山と水を指す。山は、陸地の隆起部であり、水は、液体の存在を指す。

六打 山 (Yama) 水 (Mizu)

古今格  
此の格は、  
古今格

聖子  
此の格は、  
聖子

古今格  
此の格は、  
古今格

梅一  
此の格は、  
梅一

人  
此の格は、  
人

文  
此の格は、  
文

建保四年高僧  
此の格は、  
建保四年高僧

此の格は、  
此の格は、

此の格は、  
此の格は、

十九乃格

十九  
此の格は、  
十九

此の格は、  
此の格は、

十九  
此の格は、  
十九

此の格は、  
此の格は、

此の格は、  
此の格は、

十九  
此の格は、  
十九

此の格は、  
此の格は、

いひかきまゝの格

いひか

雪月車をえよ僧の車坂

空山

雪月車をえよ僧の車坂

の字留格

いひかきまゝの格

宗古

雪月車をえよ僧の車坂

老の所をくもるれ教苑の

旧月

雪月車をえよ僧の車坂

古今

吹雪のうぶ中風をさむみ秋秋のうらり

雪月車をえよ僧の車坂

好忠集

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

雪月車をえよ僧の車坂

や結部

やハ下ハむまび辞あるくくひのやん  
くまつぬふむんる 葎きい

六く 日れなや 葵くさぐさ月る 七葎

是ハ刈やのこみやこまて河を畧するハ孔より  
ひまきりの万葉集ニ刈けなやを刈けやといひ刈  
ハやを刈ハやといひ又なほふもをまて刈ハ  
といかもおやうりされバけりハ刈月る日のたや  
あふひくさぐさ。とちりこまこ葵ハ日のこさぐさ  
まじりて葉まき根をうくはるもの  
本草細目草部 葵葉傾日不使照其根とあり

六く 喰物や門羹ありくそは月 立圃

是も冬の月こひぬをや門よりありぐ。と切りけ  
がひのやもなやのまのやこまきハ刈りまき故畧言あり

古今 春多あれ曳山乃さくさくふらるらんや 色をりゆく

六ま まきるや 葎をのぞき草はる 七葎

是ハ刈れるまきるや葎をのぞきと切りくさぐさの  
やのまきをまきんとかいふけやを刈ハ刈て葎の切や  
（まて）まきるハまきをのぞき刈とる時ハくさぐさ  
のまきとんぬ安。されどやこまきまきを刈ハ刈る

六ま 浦風や 巴がくづきむらあまの 七葎

是も村あまの浦風や巴をあら。と切り是もあまの  
あまのや。オるあまをぬくさぐさのやと前のごとく  
て村あまの浦風ハ巴をくづき刈とるがらとるがらとる  
やま

六ま 燕や 田を刈くま馬の跡 七葎

後採 是もこの終つをうく。田を刈くま。と切り  
浦風。とふ波こま。薄松の跡よあ。をれて。まきあまが

是以上のいづかの字をまゝいぢめて下がの  
かりきてりかゝるるなり

〔六〕つ 波やららな音なはらぐ村ぢぢら 無名尾

是ハハらなまゝに村ぢぢら波やららとありてつとありてつとあり

〔六〕つ 波やまら味づらふせしきりき 其角

是もみそとてやまらりていふやまらとつとあり

六帖 波やまら味づらふせしきりき

〔不ぬ〕 明早や揺らめぬ山らら 其角

是も山ららと明早やと揺らめぬと山ららとありて不のぬハ

つとありて格あれどもそのや疑ホよりくるはハむき  
ひとありてつとあり

古今 波やまら味づらふせしきりき

是ハハらなまゝに村ぢぢら波やららとありてつとありてつとあり

けつをながく例をひていづかひのやよおやのま  
のやハハのまのやハハのまのやハハのまのやハハのまのやハハのま

〔六〕ふ 名やおもふとあふとぬ秋の月 宗祇

是もこよひとあふとぬ秋の月名をやあふとつとあり

〔六〕ふ 吹廊の名やせりあふ時鳥 如雲

是もけしきに吹廊の名やせりあふとつとあり

發抄 波やまら味づらふせしきりき

〔六〕む 水やのむ土用もろく涼まふ 俣若翁

是も土用もろく涼まふと水やのむとつとあり

首尾結中ハは合のや乃波句よ出とてけやハ波句の切字

もあらとあれどもいづかひのやあれハ下結むとむを  
ひつとてつとありてけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

波やこも月やまら人やこぬ名やあふ人やまら



花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

⑥ 七 綿子 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

是、竹の葉とて花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

⑥ 七 古比 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

⑥ 七 花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ  
花のうらみ 花のうらみ 花のうらみ

⑥ 越人 操中流... 越人

是：... 操中流... 越人

⑥ 操中流... 一發

是：... 操中流... 一發

⑥ 智日 操中流... 智日

是：... 操中流... 智日

⑥ 操中流... 操中

是：... 操中流... 操中

古今 操中流... 操中

是：... 操中流... 操中

操中 操中流... 操中

古今 操中流... 操中

是：... 操中流... 操中

⑥ 野水 操中流... 野水

是：... 操中流... 野水

操中 郭公... 操中

是：... 操中流... 操中

⑥ 周招 操中流... 周招

是：... 操中流... 周招

是：... 操中流... 周招

操中 操中流... 操中

荷弓 陽  
 陽 る 陽 モウ  
 是の陽に...

養瓶 運  
 運 る 運 モウ  
 是の運に...

其用 本  
 本 る 本 モウ  
 是の本に...  
 ● 本が...  
 ...  
 ...  
 ...

小枝 水  
 水 る 水 モウ  
 是の水に...

正秀 田  
 田 る 田 モウ  
 是の田に...

張子裁 又  
 又 る 又 モウ  
 是の又に...

月情集

吹風や空まきしむるよー此出せよはまぎるよのまきしむる

是ハ昔井山をまきしむる花の白をまきしむる風

千載をみあー後まきしむるなをれがいつと袖のまきしむる

是ハまきしむる神のまきしむるをまきしむる

古今なる目あき我をまきしむるねをまきしむるあをれまきしむる

日あしきの山をまきしむるまきしむる

好撰うちまきしむるまきしむる大和撫子色やうまきしむる

古今春を履しむるまきしむるまきしむるまきしむる

原由也段はれまきしむるまきしむるまきしむるまきしむる

日松風まきしむるまきしむるまきしむるまきしむる

まきしむるまきしむる

望き 山茶菓のうごーやまきしむる嵐を

是ハふたあー山まきしむるまきしむるまきしむる

望き 名月や小国日和まきしむるまきしむる

是ハ胡やのまきしむる名月まきしむる小国日和まきしむる

上ぞのや疑おまきしむる時ハ現在のまきしむるまきしむる格

上外まきしむる時ハ現在のまきしむるまきしむる格

●まきしむるまきしむるまきしむるまきしむる

けを武人や又字ニラるるのしるしを難ししれども、其の  
 ハ況あれ、字の引く上のやハ穀のや、あれが現在の事、  
 てむまぶべき格あるを現在のの、よてむまぶるハ、  
 といけや、口念みのや、といひて、いひのや、  
 ちりたる故、有る強りも有ぞ、一、おや、きき、  
 けき、きき、きき、きき、きき、きき、きき、  
 一、や、きき、きき、きき、きき、きき、きき、

万景

かく、て、や、お、ほ、や、お、あ、ん、ゆ、き、あ、る、大、あ、ま、ゆ、の、き、お、ら、あ、ま、  
 是ハ、い、い、い、い、の、や、ニ、ツ、を、一、ツ、の、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 リ、や、ニ、ツ、あ、る、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

望き **ま**やとま梅もやまき年のも 莫山  
 是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

望き **ま**味及具此くくやま玉冬ふ 去来  
 是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

望き **ま**あ葉あく風やたをこれ刻よき 嵐雪  
 是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

是亦もよきまのまおまき

望き **ま**麦の田植やおまきま時 許六  
 是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

は概

是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

望き **ま**子供ハ風や晴き山本此栗 溪花  
 是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

古今

秋萩も色つきめれきり、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 上より、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 も、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

望き **ま**木ぐりよ白ひや付一帯花 去来  
 是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

是ハ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

まー 毒あしあなやれ。女界志 荷等

は抜き

まー 毒あしあなやれ。女界志 荷等  
まー 毒あしあなやれ。女界志 荷等  
まー 毒あしあなやれ。女界志 荷等

まー 古き馬 洞月

まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月

まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月

まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月

まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月  
まー 古き馬 洞月

是より下は... 格をいふ

や 十九二十格 格をいふ

や 風流のや 奥乃田植 唄

や 風流のや 奥乃田植 唄  
や 風流のや 奥乃田植 唄  
や 風流のや 奥乃田植 唄

や 二十 藁草小鍋あしひ 竹や 是

や 二十 藁草小鍋あしひ 竹や 是  
や 二十 藁草小鍋あしひ 竹や 是  
や 二十 藁草小鍋あしひ 竹や 是

や 二十 花さくら ちりや ちり 葉畑

や 二十 花さくら ちりや ちり 葉畑  
や 二十 花さくら ちりや ちり 葉畑  
や 二十 花さくら ちりや ちり 葉畑

如二 其用 其用

其用 其用 其用

如二 未得 未得

如二 宗祇 宗祇

如十九 其用 其用

如二十 宗祇 宗祇

如十九 其用 其用

如十九 其用 其用

如十九 其用 其用

如十九 其用 其用

如十九 其用 其用

千載 奇よハ  
又々多きは此の歌より後を玉篋の糸介は此ののころせき止

是、追と有りける下へあると二字入て下とて  
これらハのよりかりて初るぬ河まで有りたれ  
どもこまてハ追と有りける例をたんきるはこ

や十九 角力取あくらや輝のりも輝。 嵐重

是も輝と有りける下へあると二字入て下とて十九の格之  
は初るぬ河まで有り格は能くのとてく一の白づめを  
も当ニの白づめ又まままよりしてハ白中申すまても  
あ。りありそ申ふ一の白づめまで有りハ

や二十 山や鳥本は秋吹くぬ嵐れ 他と初

是ハ山や鳥あらんぬの糸吹ぬ嵐かふと有りけるは是ハ  
上よいつてくけれがハは合のやとつると同く秋のや  
を初るぬ河まで有り格は能くのとてく一の白づめを  
も当ニの白づめ又まままよりしてハ白中申すまても  
あ。りありそ申ふ一の白づめまで有りハ

て下より上へちりて切るも多しは秋ひのやハ

花や花ナラ花や鳥ナ水や鳥ナ鳥や水ナ鳥や鳥ナ

花や鳥ナ鳥や鳥ナ鳥や鳥ナ鳥や鳥ナ鳥や鳥ナ

秋や鳥ナ鳥や鳥ナ鳥や鳥ナ鳥や鳥ナ鳥や鳥ナ

切るも多しは秋ひのやハ

あ。りて十九二十の格あれども

よあるあり鳥のころも秋のころも

とき思ふされば鳥や鳥や鳥や鳥や鳥や鳥や鳥や

いひきまのり格



心子 可全 〇(心子)...

是、心子... 〇(心子)...

心子 立圃 山姥...

是、山姥... 〇(心子)...

心子 伴六 御此...

是、御此... 〇(心子)...

心子 宗祇 経...

是、経... 〇(心子)...

宗祇 〇(心子)...

全標 〇(心子)...

〇新古今... 〇(心子)...

〇金葉... 〇(心子)...

〇(心子)...

心子 〇(心子)...

心子 〇(心子)...

〇(心子)...

くや 春めくや 人さあしくは 伴桃系 荷子

くや 是ハ人さあしくは 伴桃系 荷子

くや ぶり落しゆくや 廣中の麻の角 澤雄

くや 是ハ廣中の麻の角 ぶり落しゆくや 澤雄

くや かざんくま 田植笠 吐月

くや 是ハ田くま 田植笠 吐月

くや 葉様よ花よ 初鱈 高島

くや 是ハ初鱈 葉様よ花よ 高島

まや 作の糸をゆき 秋の風 嵐雪

まや 是ハ秋の風 作の糸をゆき 嵐雪

まや 赤きうら 枯尾系 其角

まや 是ハ赤きうら 枯尾系 其角

まや やが 漆の山をさ 月 乙由

まや 是ハ漆の山をさ 月 乙由

まや 枯をて 霜よ 如鳥花 秋風

まや 是ハ枯をて 霜よ 秋風

まや 老の 恥ふ ば 園夕

まや 是ハ老の 恥ふ ば 園夕

トの里 語ハ マイ の ミ

つや 是ハ四月の サ 山 燈外

つや 是ハ四月の サ 山 燈外

つや 下 十み 日 古子 賣 老 老

つや 是ハ古子 賣 老 老

ぬや 蕨も時をとりぬや苗代田 空山

是ハあそくら田蕨も時をとりぬやと切り

ふや 塩魚の歯よととりふや秋の音 前守

是ハ秋のくれ塩魚の歯よととりふやと切り

むや 迷栗を袖でほむや女乃子 秋村

是ハ女の子ゆかぎを袖でほむやと切り

ゆや 埋火もまゆや後り寒る喜 冬寂

是ハあそくら埋火もまゆやと切り

るや 氷言を麻とあそむや夏を夏 中破

是ハ夏を補り氷言を麻とあそむやと切り汁  
るぬるつるるあけるあるあじのぬいふあは  
字の列はおのづから切り格のるを持つる後  
のぬいづるを交て白づめあは切りやと切りの申る  
と切りてあははすれ

りや 前よりちりや火桶乃 撰ら流 存美

是ハ火おけのちでんあそらありやと切り

まや 人ばてよまや矢瀬の郭公 格栗

是ハ矢瀬のちよま人ばてよまやと切り

しや 柿色む日和形や村時る 彦川

是ハ村時るちむ日和もあやと切り

● 雪よあそむもあきや彩屋敷

是ハあしやとあきを彩屋敷のきと雪よあそむと切り

又切らやみゆらとらげら難のやあり新小

まぬ人をまらほ浦乃夕あきやくかりはれ鹿もこれ

是ハやくとほとつるを判とらるげら

やま切らこれに切やみゆら

柴ぬ戸をさす利口氣の名あそくまらぬる山のを乃くを

是もさる日氣とつくるをやとらるげら

下知れどなくらんげんわんけけりハ山の峰乃  
中まゝの山にゐるくまのまゝくらんげんわんありハ  
二のり上三のり目又四のりの上三のり目まゝく  
らんげんまゝくまのまゝのり目ー口まゝーあるを以て  
まづーくらんげんわんハまゝの山にまづー

下知り切りを交てやといふも切や<sup>中</sup>の<sup>下</sup>けやらまゝ欲意のま  
あり

下知や <sup>上</sup>秋まづー<sup>下</sup>まゝむるわん<sup>中</sup>の<sup>上</sup>凡そ茄子 とき瓜

是ハ秋涼一瓜あまびいまゝあけやと切らん

<sup>羽伝</sup>花いまづー<sup>上</sup>まゝあけの<sup>下</sup>秋あけ<sup>中</sup>や<sup>上</sup>まゝとあつらん

是ハ上へらんー<sup>下</sup>まゝとあつらん<sup>中</sup>あけやと切らん

下知や <sup>下</sup>切るまゝものころはけや<sup>上</sup>梅あまき 加生

是ハ梅あまき切らんまゝおらんちれと下知まて切らん  
交てやといふまゝくらんげんわん下知まて切らんを交てや  
といふも切らんやと

下知や <sup>上</sup>あつてや<sup>下</sup>蟬も昔もぬるまぼど 其角

是も蟬も昔もぬるまぼど水とてやと切らん

<sup>羽辨</sup>あつての<sup>上</sup>園乃まゝまづー<sup>下</sup>あつて<sup>中</sup>の<sup>上</sup>氣をぬらん

是ハゆりあつてまづー<sup>上</sup>けをぬらんあつてまづー<sup>下</sup>  
園寺らんあつてやと切らん  
月とあつてまづー<sup>中</sup>の<sup>上</sup>氣をぬらん

下知や <sup>下</sup>早寝乃<sup>上</sup>雲を<sup>中</sup>まづー<sup>下</sup>の<sup>上</sup>鳴午を とき瓜

是ハ鳴午なり早寝の雲をまづー<sup>下</sup>の<sup>上</sup>切らん

下知や <sup>上</sup>山つて<sup>下</sup>海まづー<sup>中</sup>の<sup>上</sup>夕日<sup>下</sup>氣 智月

是ハ山つてまづー<sup>下</sup>の<sup>上</sup>切らん

<sup>羽辨</sup>海まづー<sup>上</sup>の<sup>下</sup>あつて<sup>中</sup>の<sup>上</sup>切らん  
くらんげんあつて下知の切らんをまづー<sup>下</sup>の<sup>上</sup>  
交てやと切らんやと

け下知まて切らるを交て和と切らばまて秋風の中とついても  
よるれとまじりしてはまぎらるるあまぐれは下知まて切らるを交  
てやとらへも切らるやとついで一是をまじりしはまじりし和あまぐれ  
まじらぐりまじりし捨るやまじりしあまぐれも皆切らる和と定む  
ばまじりしあまぐれ一まじりし捨るあまぐれとまじりし。  
○秋風の中は切らる和あれども二年よりでやげややれども  
和やあまぐれあまぐれまじりし切らる秋風の中はあまぐれまじり  
つきて和と切らるは月や夏月や夏月や秋あまぐれ  
は切らる白づめまじりし和も月やあまぐれのまじりし現在の。や  
あれは切らるこ

秋風のや

是はあまぐれまじりし切らるこ

むざんや。甲は下のまじりし

是はかうあまぐれの下はまじりしまじりしあまぐれまじりし  
切らる秋風のや。和は和のまじりしあまぐれまじりし  
白もむざんやといひては切らるを下へかまじりし

いりては秋風のまじりしあまぐれまじりしあまぐれまじりし  
あまぐれまじりし秋風のまじりし切らるはまじりし

捨るあまぐれまじりし和は和まじりし 暮冬

是はまじりしあまぐれまじりし世のりまじりし切らる

づらりしぬけ初る歯や秋の風 秋風

是も秋の風づらりしぬけ初る歯やの切らる

陪のや春のあまぐれ 耳は穴 文州

是も春のあまぐれまじりし此穴陪あまぐれ切らる

ふとんとまじりしあまぐれや東山 嵐を

是もふとんとまじりしあまぐれ切らる

かじりし二井の仁王や冬まじり 其角

是もかじりし二井の仁王切らる切らる是は

水まじりし二井の仁王切らる切らる 素丸

是は水まじりし二井の仁王切らる切らる

ちりや麻から秋乃風 越人

是も麻から秋の風ちりやのちりは是も麻のちり

散も又詩のちりや 吐月

是もちりばのちり又まきりやのちり

ちりや 探丸

是もちりばのちり又まきりやのちり

ちりや 湖春

是もちりばのちり又まきりやのちり

ちりや 素堂

是もちりばのちり又まきりやのちり

ちりや 元来

是もちりばのちり又まきりやのちり

是も田子あけてまきりやのちり

名月や 羽人

是もちりばのちり又まきりやのちり

是もちりばのちり又まきりやのちり

是もちりばのちり又まきりやのちり

はまきりばのちり又まきりやのちり

是もちりばのちり又まきりやのちり

はまきりばのちり又まきりやのちり

是もちりばのちり又まきりやのちり

秋風や 暮太

是もちりばのちり又まきりやのちり

白字の... 其角

此の... 其角

家... 也者

名... 仙瓢

是... 巨山

蘇... 其角

此... 其角

此... 其角

此... 其角

此... 其角

立... 龍

涼... 了阿

此... 了阿

此... 蒙夫

此... 且葉

今... 且葉

此... 且葉

此... 且葉

此... 且葉

此... 且葉

はめ髪と後の髪や弱むし 荷守

是ハ弱むしつぎにも後の髪とちり

強あれぬ刀るこや村志ぐれ 常秀

是ハむしぐれをびあれぬ刀るこや

ちりらあさる日や次子孫 涼菫

是ハさきの秋ちりらあさる日や

ちりらあさるとか程が秋のさき

まみつぬ縁のこ後や並火燧 左衛門

是ハあきこころまこらぬ縁のこ

新秋や衾よ布子剌るりの 木阿

是ハ衾よぬのこ布あり秋やのこ

あがよ小枕とあさ草の餅 左衛門

是ハあがよちあさのこ小枕とあさ

はれりのあがれがよらるらあさ

○歎息のちハ歎息のさき切きて切て石の傍白まきぎてんたべー

形古今 ちあさといふことごとくもあさくもきりてんたべのさき乃いまれん

千我 五月あはよまきぎうふ袖ぬれてはあまほりこれのほろこまき

これらまきぎてんたべー又歎息の出来とり

歎息のれや おもむきのさき切

れや 時ハ今花のさきや風はれ 宗祇

是ハ風はれと切り格あさう下より上へう

目もあし時ハ今花の世あれやのこ切り

切り格あさうさきのつぐあさ

れや 西風うあさ安寝が系なれや 其角

是ハあさうさきやのこつあさ



セツあるれやハも愛白ハ切られやのこもし下もむまび  
詞あるれやハも愛白ハ切られやのこもし下もむまび詞あるれやハ  
れはまのさのれやと

後ま介  
上  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。  
とつくあれや。とつくあれや。とつくあれや。とつくあれや。  
りしれまに。りしれまに。りしれまに。りしれまに。

は排  
ま中いもあられや。ま中いもあられや。ま中いもあられや。ま中いもあられや。

まも切り格とありしれま。まも切り格とありしれま。まも切り格とありしれま。まも切り格とありしれま。  
てし人とのまらうとぞむびていあふ。てし人とのまらうとぞむびていあふ。てし人とのまらうとぞむびていあふ。てし人とのまらうとぞむびていあふ。  
まああれや。まああれや。まああれや。まああれや。

新入りの歌

まも切られ

切られ  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

切られ  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

切られ  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

切られ  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

切られ  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

合衆  
まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。まらうとぞむびていあふ。

古今  
お月十六日 鳴もあがりなんほほほまほまほ〜 呪わしの書なをゆめたり

けあんのものさくも〜  
はよのあんのいのちを類かしのつれづれと  
おまびよあるかんと〜  
時にあめもあまも格とあんのあのも下れ  
なやめてあま

**めや**

是は切のやま〜  
まは〜入やま〜やま〜のやま〜

めや 蠅追つ子妹とあめめや 尻尾 其角

昔ハ辰つり 蠅追つ子妹とあめめやと切〜まほ〜まほ  
めや〜まほ〜いせま〜と〜  
めや〜めや〜あ〜と〜  
あ〜は〜をま〜と〜

古今  
うきうきハ秋あま時やとさうぢ〜ん花こをち〜  
是ハ切の格とあめめとあ〜と〜と〜

切のやまを秋あま時やとさうぢ〜ん花こをち〜  
めは〜うれめや根は〜うれ〜と〜  
や〜

**おのたまや**

是ハ切のや

おのたまや 是ハ切のや 註入

是ハ切のやもまほ〜と切のやと切のやと切のや  
か〜び〜

浅茅系をう〜  
是とあひ〜  
〜の〜の〜の〜

**うや**

是ハ切のや

うや 里ハ〜花守の子孫や せせが









夕のや 鶴 雁 ぬれて 海 藻

是も秋のつりあはれが 雁 雁 の 一 一 一 一 一 一 一 一

舟のや 貝の 齒 きの ころ け

是ののよりかきし 貝の 齒 きの ころ け

けの 海 藻 の 横 笛 の 音 せ せ せ せ せ せ せ せ

り 持 ち け け け け け け け け

け け け け け け け け

く 海 津 吉 物 諸 古 今 著 聞 固 今 六 帖 末 抄 子 系 七 餅 借 の

連 寄 又 發 自 亦 ち ち ち ち ち ち ち ち

え 日 や 何 ち ち 人 朝 び け

是のあはれけ ち ち ち ち ち ち ち ち

忠 知

古 五 十 九

け け け け け け け け

世の中を 何 ち ち 人 朝 び け け け け け け け け

勝 秋 月 づ の ぶ ち 月

是の 水 の 月 や け け け け け け け け

夕 秋 の 色 け け け け け け け け

是ののよりかきし 夕 秋 の 色 け け け け け け け け

け け け け け け け け

下 下 の 朝 け け け け け け け け

切れざらざるの由き外ありしむるれども此格ハ俳諧の者  
白木のや外れとついでその法ありそハ外系の部  
志のありしむるそハあがむるや此下よりあがむ切  
ふあを強らよむる

あがむるやの下は切らふ所あり

△<sup>外系</sup>あがむるやあまれ花をうらぐは嵐がうらむる園の杉むら

是ハ園の杉むら嵐がうらむとありより下  
へ受ふまゝは是亦がよりかりてむら切ら

△<sup>古介</sup>大原やを一舟の山もさそは非代のこもさひづら

是ハ山をよりかりてめし知ら

△<sup>邪系</sup>あがむる海や月のひかりたくらうは波の花も秋にまよ

是ハ外よりかりてりし切らりこれらよなむ  
らてあがむるやの下ハ切らあある格をんれ  
金

あがむるやあがむる河あがむるそ十八十九二十の格

△十八 灌<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>度<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>寺<sup>ハ</sup>系<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup> 反考

是ハ外のよりあれが系とありし下へと二字入  
ててあをばを合してあまそそ十八の格

△十九 花<sup>ハ</sup>代<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>代<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>綿<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup> 越人

是ハ外のよりあれが一とありし下へあがと二字  
入てあまそそ十九の格

△十九 志<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>別<sup>ハ</sup>ある<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup> 宗因

是ハ河のよりあれが外のよりとありし下へあがと  
二字入てりしとあをそそあをそそ十九の格

△十九 晴<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>灰<sup>ハ</sup>の中<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup> 十七

是ハ外のよりあれが系とありし下へと二字入  
つとあをそそ十九の格

△十九 月<sup>ハ</sup>面<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup> 有佐



是ノ部ノ...  
...

十九 律書 通食の時 直友

是ノ部ノ...  
...

...

...

...

...

...

二十 律書 通食の時 井

...

...

...

の部

...

- ...
- 苗楯を体...
- ...

...



Handwritten text at the top of the page, including a circled character '六' and various symbols.

Handwritten text enclosed in a rectangular box.

Handwritten text with a circled character '六' and a square symbol, followed by a line of text.

Handwritten text with a circled character '六' and a square symbol, followed by a line of text.

Handwritten text with a circled character '六' and a square symbol, followed by a line of text.

Handwritten text at the top of the second page, including a circled character '六' and a square symbol.

Handwritten text enclosed in a rectangular box.

Handwritten text with a circled character '六' and a square symbol, followed by a line of text.

Handwritten text with a circled character '六' and a square symbol, followed by a line of text.

Handwritten text with a circled character '六' and a square symbol, followed by a line of text.

Handwritten text enclosed in a rectangular box.

其れ月出油より出て赤板の

ひり吉きやちよふ赤板やとあり今れ水奉ふ赤板のとりはこい

青柳の節ひ乃指のまは月 其角

是れまの月を柳の節の指のと知り

見ぬまをさぐれ歩はつ時を 其角

是れほきまにぬまをさぐれあひくつ知り

ねまの月があつての節へ 漢目

是れ時をさそりあの月があつての節へ

風よ二日此方のまをさるる 其角

花のまをさるる上野の草の 其角

切し格けしはまの節へさるる上野の草を切し

新のまをさるる川あつたる 其角

是れ川を四つさるる川あつたるの川を切れてもと

流りけしはまの節へさるる川あつたるの川を流り

古今 秋の月山辺をさるる川あつたるの節をさるる

月 是れ乃まの節へさるる川あつたるの節をさるる

古今 是れ柳の節へさるる川あつたるの節をさるる

秋風の節へさるる川あつたるの節をさるる

日 是れ川をさるる川あつたるの節をさるる

天の節へさるる川あつたるの節をさるる

是れ川をさるる川あつたるの節をさるる

是れ川をさるる川あつたるの節をさるる

是れ川をさるる川あつたるの節をさるる

六

馬神の神六負は方

周木

是のついでに眉のついでに神の神六神のついでにあはれと

五六

おそくはついでについでに後を答ぬる

木阿

是とおそくはついでについでに答ぬる

河港

おそくはついでについでに答ぬる

おそくはついでについでに答ぬる

千枝

おそくはついでについでに答ぬる

おそくはついでについでに答ぬる

が乃部

かぶつはついでについでに答ぬる

六五

ついでについでに答ぬる

探丸

ついでについでに答ぬる

六六

郭公あり風が雨はあ

利午

七

秋高月ハ細きがあはれあり

佛を新

けつてついでについでに答ぬる

松ま

秋の栲れついでについでに答ぬる

五

秋の田を稲をよついでについでに答ぬる

# 𧄎乃部

𧄎とハリリリリコリレハリハリハリハリハ  
おはかどおぞりれたが  
あどのあひのこびひらけをさすうて𧄎  
しひてこゝろをさうとんねー  
くまうがふむる あ は

⑥く いしうう。時あけぬく。淡田の橋。 大州

古今 ちんせいのまーい。いしうう。時あけぬく。とちり  
まぢきまぢのいしうう。まぢまぢぬらう。いしうう。まぢまぢをまぢまぢまぢ

⑥せ たれへう。葎あそく。みぢ花のま。 まぢ

是ハハのまぢ。あそく。みぢ。花のま。とちり。いしうう。まぢ  
あまハことをまぢたれへう。まぢ。とちり。いしうう。まぢ

ちんせいのまーい。いしうう。まぢ。とちり。いしうう。まぢ

⑥ま 初時あまひ出けけゆへ 端水  
是ハ初ーぐれけくまぢ。あまひ。出けけ。ゆへ。とちり

換衣 ひしあまのまぢ。あまひ。出けけ。ゆへ。とちり  
⑥つ こまぢあひふ。春あひ貝の音 破音  
是ハ貝のまぢ。あまひ。ふ。春。あひ。貝の音。とちり

全聲 友のあひ月待あひのまぢ。あまひ。出けけ。ゆへ。とちり  
⑥ぬ 人あぢちるをえて居けけ花 岸水  
是ハけーのまぢ。あまひ。出けけ。ゆへ。とちり

彩古今 甘まぢあひちるをえて居けけ花 曉山  
⑥ふ 人あぢちるをえて居けけ花 曉山  
是ハけーのまぢ。あまひ。出けけ。ゆへ。とちり



The first part of the manuscript is written in a cursive script, likely representing a musical notation or a specific dialect of a language. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be organized into columns or groups. The handwriting is fluid and characteristic of historical musical notation, possibly for a lute or similar stringed instrument.

Handwritten text or signature at the bottom right of the page.

The second page of the manuscript contains a similar cursive script. It is structured into three distinct sections, each preceded by a boxed label:

- Section 1:** Labeled with a boxed character (possibly a variant of '世' or similar), followed by a line of cursive text.
- Section 2:** Labeled with a boxed character (possibly a variant of '世'), followed by a line of cursive text.
- Section 3:** Labeled with a boxed character (possibly a variant of '世'), followed by a line of cursive text.

Below these sections, there are several more lines of cursive text, some appearing to be a continuation or a separate part of the composition. The overall style remains consistent with the first page, suggesting a unified system of notation or writing.



かゝるゆゑもせむしびにたゞたゞとていへば  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば  
とていへばつゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば  
いへばつゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば  
とていへばつゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば

古今  
源はせの中も流はあつていへばつゞきつゞきとていへば

後集  
後集はこれゆゑの縁糸志のつゞきつゞきとていへば

西坂の山吹の香別

西坂の山吹の香別  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば

朝顔よりつ宿せし使  
其角

朝顔よりつ宿せし使  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば

とていへばつゞきつゞきとていへば  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば

月も花たれとていへば  
起百

月も花たれとていへば  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば

つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば  
つゞきつゞきとていへばつゞきつゞきとていへば

つゞきつゞきとていへば  
つゞきつゞきとていへば

卷

十八九二十格

卷六

大徳神宮の御祭儀

正秀

卷九

大徳神宮の御祭儀

正秀

卷二

大徳神宮の御祭儀

正秀

卷九

大徳神宮の御祭儀

正秀

卷二

大徳神宮の御祭儀

正秀

十一

卷九

大徳神宮の御祭儀

正秀

卷九

大徳神宮の御祭儀

正秀

大徳神宮の御祭儀  
大徳神宮の御祭儀  
大徳神宮の御祭儀  
大徳神宮の御祭儀



けき。つや。ある。と。ころ。ある。あ。つ。ぬ。る。  
け。め。る。上。より。穀。辞。く。ぐ。い。の。何。お。り。か。る。時。は。ま  
ま。下。り。て。い。ぬ。ん。の。ま。れ。あ。る。が。あ。る。お。り。周。り。も。皆  
ら。ん。と。い。ふ。ま。なる。も。り。り。と。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
あ。ん。の。ま。の。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。ら。む。の。及。る。こ

ソハナクモモミダ格

ソハナ

ゆりく。落葉を何と神吾月

貞徳

是のあり。く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
神。吾。月。ソ。ハ。ナ。ク。モ。ミ。ダ。の。り。け。あ。り。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。  
何。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。

ソハナ

ソハナ。福を下し瀬の大井川

其角

是のあり。く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
大。井。川。ソ。ハ。ナ。ク。モ。ミ。ダ。の。り。け。あ。り。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。

百七十一

ソハナ。福を下し瀬の大井川  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
ソ。ハ。ナ。ク。モ。ミ。ダ。の。り。け。あ。り。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。

全葉

ソハナ。福を下し瀬の大井川  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
ソ。ハ。ナ。ク。モ。ミ。ダ。の。り。け。あ。り。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。

野のふふと何の詞

是のむまびよ不及詞

あ。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。

木山

是のあり。く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。  
木。山。ソ。ハ。ナ。ク。モ。ミ。ダ。の。り。け。あ。り。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。  
く。ま。れ。あ。る。と。い。ふ。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。は。ま。れ。

少... 是... 尚白

中... 是...

計... 尚白

秋... 鬼貫

梅... 秋...

紫... 秋...

秋... 是...

是... 秋...

秋... 田大

秋... 秋...

秋... 秋...

かろきたれもあ。と改ま。ましむまびて切なり

く年の白髪は神乃むり系 去来

是もいぐと幾何あれども下よもとちれがたか何あるか  
下よもいぐと幾何あれども下よもとちれがたか何あるか  
去来抄は太宰府奉納の白とありて

許六云去来白の切字ニツ用字ハ決あり  
け白切字ニツの病あり

とられども切字より六字をこの端の末を切ると  
をけ白のふと切字のいふて切字ハニツのふと  
て類の下は何をへとていふもたまもたか何あるか

好古今  
已せれるふんへとらふ旅長は。つとぬる山路ありとも  
是ハ強きなり。へとらふ山路ありとも。已せれ  
るふんへとらふと切字をく是ハ何をへと  
多れども何と又

正終

うより。はより。あすの月あれはる人さへつりぐれうあ

是ハのふとあす。されがま来が白ハ病もわら  
許六ハ人し知れる。排士ふるまあてひかくと  
る物ぞこれこそあすを祿のけもあすんた  
はよのういふつり

うより。はより。あすの月あれはる人さへつりぐれうあ  
是もたか何あれはむまびる不及

唯やらがは女は。今朝の妻 去来

是ハけのあす。れやうかひま。似たり。と切りけ  
り。類ハ人さあひてよその人をいれ。けがと  
いるを。あまのいふく。あまをうもあひ。あまのつ  
もあひ。いふく。いふのさあ。あひ。が。是も。う。さ。あ。り。よ  
類といふ

古今

くらむのまのよそちまうたれかあすみだれかあす  
是もいふとまう。類も。あま。人。は。射。し。他。の。人。を  
し。れ。ゆ。え。は。み。だ。れ。人。さ。あ。ひ。ま。あ。ひ。さ。あ。り。よ

さあれが他をさすてりよ義之けおひいたる約まで  
下のむまびふ不及

および清くぬ小土よれ。世望のふ。 忠知

是れも別よのふもつるあまとりよさあれがさるがひの詞  
ふがうにささぐひのさあれが他をさすてりよ義之けおひいたる約まで  
下に外おともつるさるあり

風雅 人されがあふんかしててもなまはくひふくたよりぬさきま

これくもあまのくひもあくとつるさあれがさるがひの詞  
あてもささぐひのさあれが下よ外おとも  
いささあうこれらハ詞よりかりされが外のさる  
あま外おともつるさるあり

切る、類

いさぐひてよひさるさるぞまて切る格ハどの  
部よさる

は五流中りづこお月のぬりさる 其角

是ハ五月のぬりさるさ流やづこと切るは上よやと

いり新もやりづこと切るもおほり

あまうさあげがうたま月人舟 其角

是ハ月人舟あまうさあげがうたま月人舟

玉糸母をれ妻戸のさるハ誰 其角

松さるり伴概がさ買うかハ誰 其角

斤そだの本社ハづぐ其あま 昌雅

是ハなあま斤そだの本社ハづぐと切るは上よやと  
詞ハ切る格より下よむまびあハ新もれ!

主ハ誰木綿さるる秋のふ 尚白

是ハ秋のふあまさるさるる秋のふ

花さるとさるる似合人ハ誰 其角

古今 切れの小あやづことさるさるの似合人ハ誰

ISSEIDO  
 田神 京東  
 ¥150  
 24193  
 11年7月5日

饒舌録 上巻終

6492  
 3.14

正統  
 是ハこゝろぎの破のあしきけ仲よびでさうぶ  
 れの小うちやぶくくとありん  
 是ハ風の音をせすも今ハ物やかれしき世平ハ  
 いまやいづれとあらまあり

571



